様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　６ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３２４０１
研究種目：若手研究
研究期間：2020～2023
課題番号：２０Ｋ１３７７９

研究課題名（和文）子どもの基本的信頼感を育てる里親の養育スキル－食生活、実親の話題を中心に－

研究課題名（英文）Parenting skills for foster parents that foster children's basic sense of trust: Focusing on the themes of eating habits and birth parents.

研究代表者
福島　里美（Fukushima, Satomi）

跡見学園女子大学・心理学部・講師

研究者番号：７０５３２７２９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　500,000円

研究成果の概要（和文）：　子どもの基本的信頼感を育てる里親の養育スキルとして、食生活における里親子のかかわりと、実親への思いについて面接調査の結果を分析した。食生活については、里親の悩み26エピソードと、里親の工夫39エピソードを分析した。その結果、食生活では五感を通した里親子間の交流がみられ、0歳代からの基本的信頼感を育む親子関係と共通していた。実親については、実親への評価が子どもの自尊心にもつながりやすく、また実親に対するイメージや評価は子どもの成長とともに変わる。里親は、そのことへ配慮しながら、子どもの理解に合わせた対応をしていた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究は、子どもの基本的信頼感を育てる里親の養育スキルとして、食生活と実親に関する話題に焦点を当てた。いずれも里親養育現場では、里親子関係を揺るがすほど大切な課題である。それぞれについて、里親の悩みと対処法を、面接調査をもとに分析した。その結果、施設の食習慣の影響や、里親子であることが気づかれにいことなど、日本ならではの養育の課題とその対処法が明らかになった。里親は、子どもの気持ちに細やかに配慮しながら、安心できる環境を整え、基本的信頼感を育てる基盤づくりをしていることが分かった。また本研究では、里親向けの研修や児童相談所の研修などで研究成果を還元し、養育実践に役立つようにした。

研究成果の概要（英文）：　The theme of this study was foster parents' parenting skills that foster children's basic sense of trust. We analyzed the results of an interview survey regarding foster children's relationship with their eating habits and their feelings towards their birth parents.I analyzed 26 episodes of foster parents' concerns about eating habits and 39 episodes of foster parents' responses.As a result, foster children interacted with each other through their five senses during eating habits. This interaction is the same as the parent-child relationship that fosters a basic sense of trust starting from the age of 0. Regarding biological parents, evaluation of biological parents is likely to lead to children's self-esteem. Children's images and evaluations of their biological parents change as the child grows up. Foster parents responded in a way that was tailored to the child's understanding.

研究分野：児童家庭福祉

キーワード：里親養育　里親養育支援　基本的信頼感　心理支援　コミュニティ・アプローチ　実親交流　食生活の悩み

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

＜里親に知識と養育スキルを付与する支援の限界＞

日本の里親養育支援は未だ十分とはいえないものの、支援者は徐々に増加し、研修･支援の幅も広がってきた。ライフストーリーワークやテリング（才村・大阪ライフストーリーワーク研究会, 2016）といった里子が自らの生い立ちを肯定的に受け入れるための支援や、フォスタリングチェンジプログラム（Bachman, Karen., Blackeby., etc, 2011）のような養育スキルトレーニングは、海外で効果が実証された有効な手法であり、筆者も里親支援に活用している。ところが、子どもの育て方や生活スタイルには、文化的な差異がある。例えば、乳幼児の寝かしつけでは、欧米は子どもを一人で寝かせることが一般的なのに対し、日本では「川の字」と呼ばれるような親子一緒の就寝スタイルが大多数を占める。また、子どものしつけにおいても、日本によくある「試し行動」とされる行動を受け入れる対応は、欧米にはみられない（福島, 2018）。

新たなスキルや知識を海外から取り入れ、トップダウン式に里親に付与するだけでなく、国内に根付いた里親の経験やスキルにも焦点を当て、里親の知恵を共有するボトムアップ式のアプローチも求められているのではないかと考えられる。

＜国内の里親養育スキルの開拓＞

筆者はこれまで里親に養育のコツをたずねる面接調査を実施し、「ほめ方･叱り方」や「試し行動への対応」（福島, 2016）、「里親が捉えた試し行動」（福島, 2018）について面接の情報を整理し、里親にフィードバックしてきた。そこで重視したのは、里親の視点を尊重し、里親に伝わるよう結果を集約することである。例えば試し行動への対応では、KJ 法で具体的な行動を分類し、里親の語りに心理学的意義を加えてフィードバックした。里親の経験を意義付けた知見は、地域を越えた里親からも共感され、好意的に受けとめられてきた。

２．研究の目的

＜子どもの基本的信頼感を育てる養育スキルとは＞

本研究は、「食事を通した里親子の関係形成」と「実親に対する子どもの思いをどう支えるか」の 2 つに焦点を当て、里親の具体的な対処行動を明らかにし、里親と共有することを目指す。このテーマを選んだのは、筆者が行ってきた調査において里親から自主的に語られた里親の関心の高いテーマであり、子どもの基本的信頼感を育てる上で重要な課題だからである。

基本的信頼感とは、E.エリクソンの心理社会的発達理論における最初の発達課題であり、生後 1 年ほどの間に安定した養育者との関係を通じて獲得され、この世界が安全であり、周囲の人は信頼でき、自分はこの世に生きていて良いのだと感じられる感覚である。

通常の育児では、母乳やミルク、おむつ交換、スキンシップを通じて基本的信頼感を獲得すると考えられているが、里親養育の場合、里親子が生活を共にしてから、この基本的信頼感を育て直す親子関係が始まる。その象徴が「試し行動」とよばれる子どもの行動である。試し行動は、食を通した親子のやりとりで顕著に見られ（福島, 2018）、里親は「好きなものばかり食べる」「味噌汁をわざとこぼす」といった子どもの行動と向き合い、受け入れ、子どもの基本的信頼感を育てながら親子関係を築く。

試し行動を乗り越えた場合も、長期にわたる養育では、子どもの基本的信頼感が揺らぐ時期が再度訪れる。それが「実親に育てられていない事実」に子どもが向き合う段階である。子どもは実親に捨てられたと感じたり、自分の誕生は望まれなかったのだと感じたり、里親はお金をもらえるから育てているのではと疑心暗鬼になったりする。

筆者が里親と共同で行った 73 名の里親への質問紙調査では（未発表）、小学校高学年から成人までの里子･養子は、各年代とも 10～18%は「生きていても仕方がない」「自分は早く死ぬ、または生きてはいけないと思っている」と感じていた。さらに自己肯定感の低さは、幼児から小学校低学年で 25%、小学校高学年は 36.4%、中学生は 43.8%にみられた。里親に分かる範囲だけでもこれだけ多くの子どもが、自己の存在を否定的に捉え、基本的信頼感の揺らぎをうかがわせるのは衝撃である。そして基本的信頼感の揺らぎを示す時期は、子どもが「実親に育てられていないこと」を空想や物語としてではなく、事実として理解し始める時期と重なる。

本研究は「食事を通した里親子の関係形成」と「実親に対する子どもの思いをどう支えるか」の２つに焦点を当て、子どもの基本的信頼感を育てる里親の養育スキルとして明らかにすることを目的とする。そしてここで得られた知見を里親と共有できる養育スキルとして示すことを最終目標とした。

この試みは、専門家が里親に知識とスキルを付与する支援とは異なり、里親自身のもつ知識や経験、スキルの意義を見出そうとするものである。また研究室から発信される情報とは異なり、生活の場から見出され、発信される情報である点で、コミュニティアプローチとしての意義をもつ。

３．研究の方法

研究１：食事を通した里親子の関係形成

里親養育で遭遇する食事に関する課題について、里親がどう対処し、解決したか半構造化面接によるデータを分析する。研究対象者は、里親 10 組 12 名。その内訳は養育里親 8 組 9 名、専門里親１組 2 名、ファミリーホーム１組１名である。10 組の里親が語った食事の悩みに関する 26 のエピソードから、具体的行動を抽出し、KJ 法を用いてカテゴリーごとに分類した。また、食生活の悩みを乗り越える工夫についても、39 のエピソードを抽出した。

研究２：里親は、実親に対する子どもの思いをどう支えているのか

里親を対象に行った半構造化面接の逐語データから、実親とのかかわりに関する語りを抽出し、分析を行った。協力した里親は 16 組、里父１名、里母 13 名、里父母同席が 2 組となる。

研究３：現場へのフィードバックと意見交換を行い、エンパワメント実践としての成果を問う

養育スキルを里親へフィードバックする機会を設け、里親からの率直な感想や意見をうかがい、本研究の里親に対するエンパワメント実践としての成果を検討する。学会発表や研究会発表の場合は、養育経験をもつ里親との接点が少ないことから、里親や里親支援者向けの研修においても研究成果を活用し、意見や感想などのフィードバックを得る。

４．研究成果

＜研究１＞

研究１では、里親の食生活に関する悩みは、【施設の食生活の影響】、【実家の食生活の影響】、【食事の量】、【準備の苦労】の４つに分けられた。

子どもが児童養護施設から来た場合も、実家から来た場合も、里親は、背景にある食習慣の違いや、経験、食習慣がついていないことによる課題と向き合っていた。偏食や食事の量の悩みは、一般家庭でも起こりうる課題だが、里親家庭では、子どもの生活歴や食文化が異なる分、一般家庭とは違った難しさがあった。長期に渡る偏食や過食など、対応の難しい課題も挙がった。

Lanyado（2003）は、社会的養護の子どもが新しい里親家庭に移ると、それまでの“慣れ親しんだルールに基づく慣れ親しんだ文化への喪失感を経験する”と指摘する。前の養育者との別れだけでなく、慣れ親しんだ生活環境や食事の場、様々なルールが変わることもまた、子どもにとって喪失体験になり得る。したがって、里親家庭での食事は、単に空腹と栄養を満たすだけではなく、異なるルールや文化をもった前の生活との別れを実感しながら、新しい生活のルールに適応し、新しい信頼関係を作り上げていく意味があるといえる。

表１　食事に関する悩み

大分類	小分類
施設の食生活の影響	施設の食習慣 家庭の食事の経験不足 味わっていない
実家の食生活の影響	血縁家族の影響 食べられなかった経験の影響 偏食
食事の量	食べ過ぎる 食べない
準備の苦労	買い物の荷物の重さ 夏休みの食事作り

表２　食生活における工夫

大分類	小分類
子どもの好みを尊重する	嫌いなものは食べさせない 子どもの喜ぶメニューにする 子どもが望む量を与える
子どもへ理解を示す	食習慣を理解 叱らない
体験を増やす	料理･片づけの役割を与える 食材に触れさせる
食べさせる工夫	食事中の声かけ 調理の工夫 手作りする

表１・２とも福島(2021a)をもとに作成

次の食生活における工夫は、【子どもの好みを尊重】【子どもへ理解を示す】【体験を増やす】【食べさせる工夫】の４つに大分類された（表 2）。前述の食生活の悩みを抱えながらも、里親は子どもの好みを尊重し、生活背景や、その時の心境に理解を示しながら、食習慣の違いや、子どもたちの示す様々な反応を乗り越えていた。また、食卓以外のところでも工夫がみられ、畑の農作業や、日々の役割分担、買い物中の会話といった体験も、子どもの成長を支えるために意図的に行っていた。調理の工夫では、食べやすく調理し、たとえ苦手なものでも喜んで口にできるように調理していた。子どもの口に合うように調理し、子どもの反応に寄り添うプロセスは、基本的信頼感を育てる親子関係と重なる。

この研究成果について、日本家族心理学会第 38 回大会にて口頭発表を行った（福島，2021a）。発表時の参加者からの意見をふまえて考察を修正し、養育里親研修の場でも研究成果を紹介した。里親研修の事後アンケートで書かれた食生活の結果に対する感想や意見をもとに、さらに考察を修正し、里親向けに情報を集約し、里親の面接時の声を盛り込んだ書籍として、電子書籍にて公開した（福島，2024）。

＜研究２＞

研究２では、実親に対する子どもの思いをどう支えているのかをテーマに、分析中である。現段階では、【実親と関わる難しさを知る】【里子の気持ちに寄り添う】【里子による実親理解を見守る】【実親と里子の関係をつなぐ】の４つに大分類した（表3）。

里親支援現場における実親交流が、年々増加しており、その状況も変化していることから、引き続き現状をふまえた追調査を進めたい。

2023 年 9 月には、家族心理学年報 41「子どもと家族の心理的支援」の［各論］にて、「里親家庭に対する養育支援」の章を全 8 ページ執筆する機会を得た（福島，2023a）。ここでは、里親子の出会いの背景にある“別れ”や、子どもの生い立ちとの向き合い方、里親が直面する困難や支援者が留意すべき事項について、研究２で得られたデータを参考にまとめた。

表３　実親交流に関する里親の工夫

大分類	小分類
実親と関わる難しさを知る	実親へのネガティブな気持ち 実親に振り回される感覚 交流の枠組み維持の難しさ
里子の気持ちに寄り添う	里子への共感 実親を知りたい思いを尊重 実親の話題には慎重に触れる
里子による実親理解を見守る	里子に実親の悪口を言わない 実親の情報を工夫して伝える 実親の評価は里子に委ねる
実親と里子の関係をつなぐ	実親と積極的に関わる 実親に里子の成長を伝える 実親と関わり続ける覚悟をもつ 実親をサポートする姿勢をもつ 実親の苦労を里子に伝える 実親に愛された記憶を話題にする 実親と里親の呼び方を変える

＜研究３＞

本研究のテーマは、里親養育支援現場の養育者や支援者といった実践家のための研究という側面が強い。そのため、学会発表や論文執筆だけでなく、子どもの養育に取り組む実践家に役立つ研究を、実践家がアクセスしやすい場にいかに発信するかを重視し、試行錯誤をしながら取り組んだ。研究成果も里親養育支援現場のニーズに合わせて情報を収集、分析、共有し、里親養育現場をエンパワメントする方法を探索した。

基本的信頼感の形成について、親子の身体接触を通じた交流がもたらす効果が指摘されていることから、2022 年度は、親子間の機能的なタッチ（ファンクショナルタッチ）を学び、子育て支援実践する日本ファンクショナルタッチペアレンティング協会の活動に参加し、研修会講師や協会の運営に参加した（麻生・福島，2022）。当協会理事長の麻生典子氏と、互いの研究成果や支援策について情報交換を行い、これまで日本ファンクショナルタッチペアレンティング協会が行ってきた、地域の子育て支援を、児童福祉領域における大人と子どもの愛着形成に役立てる方法を検討した。科研費による研究とは別に、麻生氏と共同で行った里親や児童養護施設職員への面接調査結果をもとに、通常の親子と異なる里親子の関係形成について年代別に検討した。この調査では、KH Coder を用いた面接の分析を試み、その成果を論文として執筆中である。

また 2022 年 8 月には、東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センターのシンポジウム「虐待と向き合う児童相談所の新たな役割と可能性―地域における安心の子育て支援の基盤整備に向けて―」に登壇し、当事者のニーズに即したコミュニティ中心主義の研究方法について約 1000 人の参加者に向けて発表した。

同年 9 月には児童相談所の職員研修で講師をつとめ、研究成果をもとに里親子関係の関係形成のプロセスと、里親子関係を支える支援者の役割について講演を行った。

2023 年には、日本精神衛生学会の研修において、麻生典子氏とともに 2 月にオンライン研修、対面でのワークショップを開催した(麻生・福島，2023a,2023b)。オンライン研修では、「里親子の心の交流－里親子の関係作りの研究から－」をテーマに、年代別の里親子関係形成について、食生活や就寝といった日常生活を通した里親子の愛着形成プロセスを心理学の視点から解説した。ワークショップでは、保育士や心理職といった支援者を対象に、赤ちゃん人形を使った子育て研修の実践方法について、ロールプレイ等を用いて行った。オンライン研修、ワークショップともに全国から参加者が集い、子どもと関わる職種の現実的な課題について、率直な意見交換をすることができた。

同年 9 月には、養育里親研修の講師として、里親家庭における食生活や親子の遊び、コミュニケーションの方法について、30 名強の里親を対象にワークショップを実施した（福島，2023b）。同研修は、2024 年 8 月にも依頼を受けており、再度実施する予定である。

これらの取り組みの事後アンケートや研修後の質疑応答などから、反応や感想を確認した。里親の経験に基づく研究成果であったことから、里親やケアワーカーにとっては「共感しやすい」「分かりやすい」との声が多くあり、心理職や福祉職などの支援者からは「里親のリアルな声やニーズが分かった」などのフィードバックがあった。日本精神衛生学会の研修や養育里親研修を繰り返し依頼されることから、現場へのニーズに合わせた研究成果であり、また研究成果の発信の方法として役立っていることがうかがえる。

こうした様々な場で情報発信する中、研究報告の資料が欲しいとの要望も多く受けることから、一般向けに無料で出版できる電子書籍サービスを用いて成果の公開を試みた。まず、以前行った「試し行動」に関する研究成果を一般向けに書き下ろし、里親の言葉に重きをおいた構成と

した電子書籍「試し行動と試しではない行動を乗り越える里親」を公開した（福島，2021b）。里親から、電子書籍へのアクセスが難しいとの指摘が複数あり、ペーパーバッグも発行した。2024 年 6 月現在、この電子書籍は 56 回のダウロード、16759 ページ分の電子データ既読歴があり、ペーパーバッグは 259 冊発行し、こうした情報に対するニーズが一定数あることがうかがえた。

研究 1 の食生活に関する研究成果も同様に、一般向けに書き下ろしたものを電子書籍にまとめ、2024 年 5 月に「食生活の悩みを乗り越える里親」として公開した。こちらは、2024 年 7 月と 8 月に予定している里親向けの研修資料として活用する予定である。

引用文献

麻生典子・福島里美（2022）日本精神衛生学会第 2 回研修会「ファンクショナルタッチと子育ての感性」講師

麻生典子・福島里美(2023a)日本精神衛生学会オンライン研修会講師「ファンクショナルタッチと子育ての感性－子どもの多様な心を理解するために－」

麻生典子・福島里美(2023b)日本精神衛生学会ワークショップ講師「はじめてのファンクショナルタッチペアレンティング：子育ての感性を事例に活かす」

Bachman, Karen., Blackeby , Kathy., Bengo, Caroline., Slack, Kirste., Woolgar, Matt., Lawson, Hilary. & Scott, Stephen (2011) Fostering Changes How to improve relationships and manage dofficulat behavior ,British Association for Adoption and Fostering（上鹿渡和宏・御園生直美・特定非営利法人 SOS 子どもの村 JAPAN 監訳(2017)『フォスタリング・チェンジ 子どもとの関係を改善し問題行動に対応する里親トレーニングプログラム ファシリテーターマニュアル』 福村出版.）

福島里美（2016）里親養育の広報活動に関する実践事例研究―臨床心理学の授業で女子大学生に里親養育体験を伝える試み―，日本コミュニティ心理学会，コミュニティ心理学研究 19(2)，196-212.

福島里美（2018）里親養育における試し行動とは何か－里親委託率の高いA市里親の面接調査から－，日本子ども家庭福祉学会，子ども家庭福祉学 19(1)，1-8.

福島里美（2021a）里親が出会う食生活の悩みと対応，日本家族心理学会大 38 回大会口頭発表.

福島里美（2021b）試し行動と試ではない行動を乗り越える里親, Amazon Services International LLC.

福島里美（2022）シンポジウム 虐待と向き合う児童相談所の新たな役割と可能性 ―地域における安心の子育て支援の基盤整備に向けて― 共著 東京大学 大学院教育学研究科 附属バリアフリー教育開発研究センター

福島里美（2023a）里親家庭に対する養育支援，子どもと家族への心理的支援 家族心理学年報 41，日本家族心理学会編，26-33.

福島里美（2023b）里親養育演習「発達心理学」講師，特定非営利法人キーアセット主催.

福島里美（2024）食生活の悩みを乗り越える里親，Amazon Services International LLC.

Lanyado, M.（2003） The emotional tasks of moving from fostering to adoption: transitions, attachment, separation, and loss, Clinical Child Psychology and Psychiatry, 8(3)，337-350.

才村眞理・大阪ライフストーリーワーク研究会（2016）今から学ぼう！ ライフストーリーワーク施設や里親宅で暮らす子どもたちと行う実践マニュアル，福村出版.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計0件

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 麻生典子・福島里美
２．発表標題 ファンクショナルタッチと子育ての感性：子どもの多様な心を理解するために
３．学会等名 日本精神衛生学会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 麻生典子・福島里美
２．発表標題 はじめてのファンクショナルタッチペアレンティング：子育ての感性を事例に活かす
３．学会等名 日本精神衛生学会（招待講演）
４．発表年 2023年

１．発表者名 福島里美
２．発表標題 里親が出会う食生活の悩みと対応
３．学会等名 日本家族心理学会第38回大会
４．発表年 2021年

１．発表者名 福島里美
２．発表標題 里親養育に対する心理学的アプローチから
３．学会等名 日本子ども虐待防止学会
４．発表年 2020年

〔図書〕　計3件

1．著者名 福島里美	4．発行年 2024年
2．出版社 Amazon Services International LLC	5．総ページ数 76
3．書名 食生活の悩みを乗り越える里親　ベテラン里親に学ぶ子どもの育て方・２　Kindle版	

1．著者名 宇都宮博・野村武司・福丸由佳・福島里美・大塚斉・尾方綾・小野寺敦子・中地展生・渡邊照美・坂本一真・鴨志田冴子・三田村仰・高木源・小林智・遠藤利彦・本間恵美子・小林大介・小林千緩・八重樫大周・萩臺美紀	4．発行年 2023年
2．出版社 金子書房	5．総ページ数 160
3．書名 子どもと家族への心理的支援	

1．著者名 福島里美	4．発行年 2021年
2．出版社 Amazon Services International, Inc.	5．総ページ数 132
3．書名 試し行動と試しではない行動を乗り越える里親　Kindle版	

〔産業財産権〕

〔その他〕

2022年8月　東京大学大学院教育学研究科附属バリアフリー教育開発研究センター主催シンポジウム「虐待と向き合う児童相談所の新たな役割と可能性―地域における安心の子育て支援の基盤整備に向けて―」に登壇「臨床心理学からみた統合的児童相談モデルの提案」を発表
2022年9月　横浜市児童相談所　里親支援向上研修「里親家庭が安全基地になるまで」講師
2023年9月　川崎市里親養育演習　講師

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関